

ヨハネの福音書 13 章の 「今は来れないが、後で来る」というしるし

ベレーシート

● 前はイエシュアが弟子たちの足を洗うことの意味について学びました。今回はそのことを思い起こしながら補填をし、13 章にある他の事柄について触れたいと思います。他の事柄とは、イスカリオテのユダの裏切りに対するイエシュアの心情について、さらにはペテロに対してイエシュアが語った「わたしが行くところに、あなたは今ついて来ることができません。しかし後にはついて来ます」という本意について、分かち合いたいと思います。

1. 「新しい戒め」・洗足という霊的な交わり

● イエシュアが弟子たちの「足を洗う」時に「上着を脱ぎ」(4 節)、そして再び「上着を着る」(12 節)ことをしています。聖書で「(上着を)脱ぐ」とは「死ぬ=(いのちを)捨てる」という意味で、「(上着を)着る」とは「よみがえる=(いのちを)得る、受ける」という意味です。つまり、「洗足」の出来事は、**イエシュアの死と復活(死んで生きる)**という象徴的な啓示だということです。

● 洗うのが全身ではなく、なぜ「足」なのでしょう。それは「足」を意味するヘブル語は「レゲル: רֶגֶל」で、その初出箇所である創世記 8 章 9 節にしのことが預言的に啓示されています。再度、確認しておきたいと思います。

【新改訳 2017】創世記 8 章 9 節

鳩は、その足を休める場所(רֶגֶל)を見つけられなかったので、箱舟の彼のもとに帰って来た。
水が全地の面にあったからである。彼は手を伸ばして鳩を捕らえ、自分がいる箱舟に入れた。

● 「鳩は、その足を休める場所を見つけられなかった」とあります。さばきの水がいまだ全地の面にあったからです。「鳩」は「聖霊」のメタファーです。「鳩の足」とはキリストの死と復活によって与えられる「いのちを与える御霊」を預言的に象徴するものです。また「足を休める場所」とは御霊が内住することになる「人の霊」を意味します。つまり「鳩が、その足を休める場所を見つける」とは、人の霊の中に「いのちを与える御霊が内住すること」の預言的・奥義的啓示だったのです。創世記 8 章 9 節では、まだそれが「見つけられなかった」、すなわち「まだなかった」のです。これは、ヨハネの福音書 7 章 39 節にある「イエシュアはまだ栄光を受けておられなかったの

で、御霊はまだ下っていないかった」(原文は「まだなかった」)ことの預言的啓示の型です。この預言が実現するのはいつかといえば、それはイエシュアが復活した日の夕べ、イエシュアが弟子たちに「息を吹きかけて、『聖霊を受けよ』と言われた時」です。イエシュアはそのことを預言的・奥義的に示すために、弟子たちの足を洗われたの

ヨハネの福音書の「エキス」

でした。しかしその意味を悟る者はだれ一人いませんでした。なぜなら、それを理解させる聖霊がまだなかったからです。この聖霊こそ「いのちを与える御霊」(Iコリント 15:45)であり、人をきよめて新創造する「再生と刷新の洗い」(テトス 3:5)なのです。

●「再生」はすでに包括的になされていますが、**いまだ**完成されていません。ですから聖霊による刷新の洗いが必要なのです。エックレーシアでなされる「洗足式」や「聖餐式」はこの「聖霊の刷新」を意味しています。しかし、宗教はそれを制度化し、儀式、慣例となってしまう、聖霊による刷新に至っていません。これはユダヤ教の教え、つまり、「罪と死の律法」に他なりません。聖霊による刷新は、私たちの「理解の型紙」を打ち破って(死んで)、いのちをもたらします。初代教会の「パン裂き」はまさに聖霊による刷新であり、そこではいのちの上塗りが日々なされていたのです。これこそが、イエシュアのいう「新しい戒め」(13:)であり、「互いを愛すること」なのです。「これらのことが分かっているなら、そして、それを行うなら、あなたがたは幸いです」の意味です。このことを回復することがエックレーシアの務めです。「ほうれんそう」(報告・連絡・相談一話し合い)ではなく、聖霊によるいのちの刷新こそが、エックレーシアの本来の務めでなければならないのです。その意味でイエシュアの「新しい戒め」を受けとめる必要があるのです。

2. 洗われても、その交わりの中にいなかったイスカリオテのユダ

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 13 章 2, 18~31 節

- 2 夕食の間のこと、悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうという思いを入れていた。
- 18 ……わたしは、自分が選んだ者たちを知っています。けれども、聖書に『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かって、かかとを上げます』と書いてあることは成就するのです。
- 19 事が起こる前に、今からあなたがたに言っておきます。
起こったときに、わたしが『わたしはある』であることを、あなたがたが信じるためです。
- 20 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしが遣わす者を受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。そして、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」
- 21 イエスは、これらのことを話されたとき、心が騒いだ。そして証しされた。
「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切ります。」
- 22 弟子たちは、だれのことを言われたのか分からず当惑し、互いに顔を見合わせていた。
- 25 ……「主よ、それはだれのことですか。」
- 26 イエスは答えられた。「わたしがパン切れを浸して与える者が、その人です。」
それからイエスはパン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダに与えられた。
- 27 ユダがパン切れを受け取ると、そのとき、サタンが彼に入った。すると、イエスは彼に言われた。
「あなたがしようとしていることを、すぐしなさい。」
- 28 席に着いていた者で、なぜイエスがユダにそう言われたのか、分かった者はだれもいなかった。
- 29 ある者たちは、ユダが金入れを持っていたので、「祭りのために必要な物を買いなさい」とか、

ヨハネの福音書の「エクス」

貧しい人々に何か施しをするようにとか、イエスが言われたのだと思っていた。

30 ユダはパン切れを受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。

31 ユダが出て行ったとき、イエスは言われた。

「今、人の子は栄光を受け、神も人の子によって栄光をお受けになりました。

●イエシュアが弟子たちの足を洗われた時、イスカリオテのユダはどこにいたのでしょうか。彼はその交わりの中にいたのですが、「洗足」というのちの交わりの中にはいなかったのです。イエシュアが弟子たちの足を洗われる前に、「**悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうという思いを入れていた**」(13:2)とあります。そしてイエシュアが弟子たちの足を洗われた後、ユダがパン切れを受けた時点で「**サタンが彼に入った**」とあります。ユダはイエシュアから「あなたがしようとしていることを、すぐしなさい」と言われてその場を離れます。イエシュアのことばは直接的にはユダに語られています。しかし悪魔・サタンに対して語ったとも言えるのです。

●「サタン」は旧約で 34 回、新約では 14 回使われています。「悪魔」という語彙は新約のみで、37 回使われます。ヨハネの 13 章では「悪魔」と「サタン」の双方が使われています。いずれもイスカリオテのユダにかかわっています。敵の策略のすべてを知っておられたイエシュアが御父のみこころを実現させるために、イエシュアの方からイスカリオテのユダにひと切れのパンを分け与えることで、ユダの裏切りを先導させたかたちです。つまりヨハネの場合、イエシュアの受難と死はサタンの策略によってもたらされたものではなく、イエシュア自身が自らの意志でそれを引き受けられたことが分かります。しかしそのことはイスカリオテのユダにも、他の弟子たちも知りませんでした。ですから、「ユダは、パン切れを受け取るとすぐ、外に出て行った。」(13:30)のです。

●30 節には「時は夜であった」とあります(ただし、原文には「時は」という語彙はありません)。これは時間的な夜という意味ではなく、しるしとしての「夜」(ヌクス: νύξ)、つまり「暗闇が支配する時」を意味し、その夜にイエシュアは捕らえられ、受難と死がもたらされるのです。イエシュアの死は、この世の罪を贖う神の愛を現わすという御父から与えられた使命の究極的表現であり、それは同時に、神の栄光をこの世に示す最も効果的な最後の「しるし」となります。そうした流れの中に、イスカリオテのユダの裏切りが位置づけられています。イスカリオテのユダの存在は、イエシュアの敵対者たちの思いを遂げる上できわめて好都合な存在(キーパーソン)だったと言えます。

●「ユダの中に入ったサタン」でさえも、被造物の中で最も賢く狡猾な存在でありながら、自分の巧みな策略が逆に神の計画を実現させてしまうとは夢にも思っていなかったはずで、高慢なサタンが神の知恵によって欺かれたことに気づいた時には「時すでに遅し」で、地団太踏んで悔しがったに違いありません。パウロは I コリント人への手紙 2 章で「・ ・ 私たちは、・ ・ 知恵を語ります。その知恵は、神が私たちの栄光のために、世界の始まる前から定めておられたものです。この知恵を、この世に支配者たちは、だれ一人知りませんでした。もし知っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」(6~8 節)と記しています。神は「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、悟りある者の悟りを消し去る」(イザヤ 29:14)という預言を見事に実現されたのです(I コリ 1:19)。ああ、神の知恵は何と底知れず深いことか。この神が私の神であられることはなんとすばらしいことでしょうか。

ヨハネの福音書の「エキス」

●イエシュアから足を洗ってもらったユダですが、彼ははじめからそのいのちの交わりにはいなかったのです。イエシュアはすでにそのことを見抜いていたのです。

① 【新改訳 2017】ヨハネの福音書 13 章 2 節

夕食の間のこと、悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうという思いを入れていた。

② 【新改訳 2017】ヨハネの福音書 13 章 10～11 節

10 イエスは彼に言われた。「・・・あなたがたはきよいのですが、皆がきよいわけではありません。」

11 イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。

それで、「皆がきよいわけではない」と言われたのである。

③ 【新改訳 2017】ヨハネの福音書 13 章 18～19 節

18 わたしは、あなたがたすべてについて言っているわけではありません。わたしは、自分が選んだ者たちを知っています。けれども、聖書に『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かって、かかとを上げます』と書いてあることは成就するのです。（※この預言は詩篇 41 篇 9 節です。詩篇 41 篇はメシア詩篇）。

19 事が起こる前に、今からあなたがたに言うておきます。

起こったときに、わたしが『わたしはある』であることを、あなたがたが信じるためです。

④ 【新改訳 2017】ヨハネの福音書 13 章 21 節

イエスは、これらのことを話されたとき、**心が騒いだ**。そして証しされた。

「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切ります。」

※「心が騒いだ」の以前の訳は「霊の激動を感じて」でした。すでにイエシュアは 11 章 33 節で、死という現実を前にして「心を騒がせて」（=自ら奮い立たせ）とあり、12 章 27 節でも、「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一つのままです。しかし死ぬなら、豊かな実を結びます」と語った後で、「今わたしの心は騒いでいる」と語っています。そして今回の 13 章 21 節では、十字架の死を前にして「心が騒いだ」のです。つまり、**「心が騒ぐ」とは「霊において奮い立たされる」ことを意味します。怯むのではなくその反対です。**イエシュアが十字架という最も重い使命を神の計画に従って遂行するためです。ですから、13 章 27 節で「あなたがしようとしていることを、今すぐにしなさい」とイエシュアがサタンに対して主権的に命じているのです。これはサタンがイエシュアの支配下にあることを暗示しています。ヨハネの福音書では、共観福音書のように「のろわれる、わざわざいだ、不幸だ」と言ったユダに対するイエシュアの心情は一切語られてはいません。

⑤ 【新改訳 2017】ヨハネの福音書 13 章 26～29 節

26 イエスは答えられた。「わたしがパン切れを浸して与える者が、その人です。」

それからイエスはパン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダに与えられた。

27 ユダがパン切れを受け取ると、**そのとき、サタンが彼に入った**。すると、イエスは彼に言われた。

「あなたがしようとしていることを、すぐしなさい。」

28 席に着いていた者で、なぜイエスがユダにそう言われたのか、分かった者はだれもいなかった。

29 ある者たちは、ユダが金入れを持っていたので、「祭りのために必要な物を買いなさい」とか、

貧しい人々に何か施しをするようにとか、イエスが言われたのだと思っていた。

※ユダの思いは、イエシュアの他には誰一人気づいていません。

ヨハネの福音書の「エクス」

●27 節に「**そのとき、サタンが彼に入った**」とありますが、イエシュアはそれまでに繰り返し、繰り返し、「あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切ります」と語っていたのですから、ユダは自分のことが悟られていることを知っていたはずで、悔い改めるチャンスも幾度もあったはずで、しかしユダは悔い改めることをしませんでした。ですから、そのような者は遅かれ早かれ、いのちの交わりから出て永遠の暗闇に入っていくのです。

「洗足」という「いのちの交わり」が、「主との交わりの中にいる者たちのためである」ということを、イエシュアは暗に語っていることとなります。

●ユダが出て行ったとき、イエシュアは再度「今、人の子は栄光を受け、神も人の子によって栄光をお受けになりました(31 節)と言われました。「栄光を受ける」とは、イエシュアの「わたしの時」のことで、それは同時に「暗闇」が最高潮になる「時」でもあるのです。しかしイエシュアは、死と復活をとおして「**神聖な新しいもの(New Creature)を生み出す**」のです。このことを「人の子は栄光を受け(アオリスト受動)、神も人の子によって栄光をお受けになりました(アオリスト受動)」と宣言しているのです。これは御子が栄光を受けられたことで、父なる神も栄光を受けられたことを意味しているのですが、次節の 32 節では以下のように言い換えられています。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 13 章 32 節

神が、人の子によって**栄光をお受けになった**(アオリスト受動)のなら、神も、ご自分で人の子に**栄光を与えてください**。しかも、すぐに(ユースユス：εὐθύς)与えてくださいます。

●ここで「神も、ご自分で人の子に栄光を与えてくださいます(未来形)。しかも、すぐに与えてくださいます(未来形)」とは、「復活によってイエシュアに栄光を与えてくださる」ことを語っているのです。このことをイエシュアはすでに「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる」と言われていました。これはイエシュアが死人の中からよみがえることの預言だったのです。

3. 「今はついて来ることはできないが、後にはついて来る」

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 13 章 33~38 節

33 子どもたちよ、わたしはもう少しの間あなたがたとともにいます。あなたがたはわたしを捜すこととなります。ユダヤ人たちに言ったように、今あなたがたにも言います。

わたしが行く(=去って行く)ところに、あなたがたは来ることができません。

36 シモン・ペテロがイエスに言った。

「主よ、どこにおいでになるのですか。」

イエスは答えられた。

「わたしが行く(去って行く=ヒュパゴウ：ὕπαγω)ところに、あなたは今ついて来ることができません。

しかし後にはついて来ます(アコリユーセオー：ἀκολουθήω の未来形)。」

37 ペテロはイエスに言った。

「主よ、なぜ今ついて行けないのですか。あなたのためなら、いのちも捨てます。」

ヨハネの福音書の「エクス」

38 イエスは答えられた。

「わたしのためにいのちも捨てるのですか。まことに、まことに、あなたに言います。

鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」

●前回「時」に関連することで、「今は分からなくても、後で分かるようになります」(7節)がありました。「今は」とは洗足時のことですが、「後で」とはイエシュアが死んだ後、三日目に「いのちを与える御霊」となられて「人の霊の中に内在された後に分かる」ということでした。何が分かるのかと言えば、「足を洗う」この意味が分かるという意味です。しかし今回、ペテロに対して「わたしが行くところに、あなたは今ついて来ることができません。しかし後にはついて来ます」があります。同じく「今」と「後」がありますが、意味は異なります。「今と後の間」に、「あなたは三度わたしを知らないと言います」が入ります。イエシュアによって足を洗われた者は大丈夫なのかといえば、決してそうではありません。ペテロは足を洗ってもらい、いのちの交わりの中にあつたにもかかわらず、「三度、わたしを知らないと言います」とあるように、イエシュアを否認してしまうことが起こるので(ヨハネ 18:16~17, 19:25~27)。ペテロの「あなたのためなら、いのちも捨てます」ということばは肉であり、肉はイエシュアを否認してしまうのです。このことにペテロは全く気づいていません。

●と同時に、「あなたは三度わたしを知らない」というイエシュアのことばは、イスラエルの失敗を重層的に預言しています。というのは、神の選びの民イスラエルはその歴史において三度の大きな偶像礼拝の罪を犯します。偶像礼拝とは「神と人がともに住む家(幕屋・神殿・宮)」を破壊する罪であり、「あなたには、わたし以外に、ほかの神があつてはならない」(出 20:1)という第一戒に対する罪です。イスラエルはその罪によって、以下の苦しみを自ら招きます。

- ① バビロン捕囚という苦しみ
- ② 世界離散という苦しみ
- ③ 未曾有の大患難という苦しみ

●イエシュアという名前は「ご自分の民をその罪(複数=偶像礼拝)から救ってくださる方」(マタイ 1:21)という意味であり、それは「インマヌエル」(インマヌーエール: עִמָּנוּאֵל) = 「神がわたしたちとともにおられる」を実現してくださる方として遣わされた方です。「インマヌエル」は、復活されたイエシュアがその日の夕べ、弟子たちに息を吹きかけて「聖霊を受けよ」と言った時に人の霊の中においてすでに包括的に実現されています。しかしまだマルファト(御国)としては完成されていないのです。完全な御国としてのインマヌエルが実現されるのは、イエシュア・メシアが地上再臨される直前、イエシュアをメシアと信じる「イスラエルの残りの者」を起こすことでなされます。千年にも及ぶ「メシア王国」において、「インマヌエル」が実現されるのです。

●ところで、「今はついて来ることができないが、後にはついて来る」という話に戻りましょう。これはどういう意味なのでしょう。「今はついて来ることができない」とは、イエシュアの死について来ることができないということです。イエシュアが捕らえられた時、弟子たちはみなイエシュアを見捨てて逃げてしまいます(マタイ 26:56)。しかし、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエシュアは、彼らを「最後まで愛された」と記すヨハネの福音書では、イエシュアを捕らえようとする者に対して、「・・・わたしを捜しているのなら、この人たち(=弟子たち)は

ヨハネの福音書の「エクス」

去らせなさい」と言っています(18:8)。「あなた(御父)が下さった者たち」とは、あの書(=いのちの書)に名が記されている者たちのことです。

- 「今はついて来ることはできない」とはイエシュアの(十字架の)死について来ることはできないことを意味していますが、「後にはついて来る」のです。それは**弟子たちがイエシュアの証人となって殉教することを意味**します。「証人」とは「マルテユス：μάρτυς」で「殉教者」という意味を含んでいます。

【新改訳 2017】使徒の働き 1章8節

しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。

そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人(=殉教者)となります。

- 「聖霊があなたがたの上に臨む」ことを「聖霊のバプテスマ」と言います。これは外(上)から聖霊の力で覆われることを意味します。この力に「満たされる」ことを「ピンプレーミ：πίμπλημι」と言います。これによって、弟子たちはキリストの福音を大胆に語る力が与えられるのです。ですから、キリストとその教えに敵対する勢力とは自ずと対峙することになります。しかしどんなに反対され、脅されたとしても、「私たちは、自分たちが見たことや聞いたことを話さないわけにはいきません。」(使徒 4:20)となるのです。それゆえ殉教も辞さないことになるのです。しかしそのような証人となるためには、機能不全を起こしていた「人の霊」が「いのちを与える御霊」によって回復され、「インマヌエル」されている必要があります。この成就を「外側の満たし」である「ピンプレーミ：πίμπλημι」に対して、「内なる満たし」である「プレーロー」(πληρώω)と言います。この「内と外の聖霊の満たし」がなされることで、はじめて「後にはついて来る」、つまり「**イエシュアの証人となる**」ことが可能となるのです。「あなたのためなら、いのちも捨てます」と言ったペテロは、その時点では、この聖霊に満たされてはいなかったのです。

アハリート

- 皆さんは「クウォ・ヴァデス」という映画を見たことはあるでしょうか。正確には「ドミネ・クウォ・ヴァデス」ですが、「主よ、何処においでになるのですか」という意味です。私は高校生の時、まだキリストに出会う前にこの映画を見て、信仰がもたらすかに圧倒されました。信じることに自分のいのちを賭ける感動の記憶が呼び起こされます。この映画は、二世紀に書かれたペテロの殉教の物語です。ローマでペテロの説教を聞いたヘロデ・アグリッパの妾が心を打たれ、今までの生活から足を洗おうとして、ヘロデ・アグリッパとはもう寝ないと決心します。その影響は他の女性たちにも影響を与えます。男たちはその原因がペテロの説教にあることを知り、彼を亡き者にしようということになりました。その計画は、彼らの妻たちを通して、ペテロの集会に知らされることとなります。すると、そこに集まっていた弟子たちが、ペテロにローマから逃げるよう勧めます。そこでペテロはローマの町の門を出た時、そこにローマの門をくぐって都に入っていくキリストとすれ違います。その時、ペテロは「主よ、何処においでになるのですか」と尋ねるのです。主が「ローマに十字架にかかりに行く」と言うと、ペテロは「主よ、再び、十字架にかかれるのですか」と尋ねます。主の答えは「然り」。このことを聞いたペテロは我に

ヨハネの福音書の「エクス」

返り、もとのところに戻り、捕らわれの身となり、逆さ十字架で殉教を遂げたという**伝説**です。ペテロの殉教はヨハネの21章にあるように、主の限りない愛に対してなされることを暗示しています。

【新改訳2017】ヨハネの福音書21章18～19節

18 まことに、まことに、あなたに言います。あなたは若いときには、自分で帯をして、自分の望むところを歩きました。しかし年をとると、あなたは両手を伸ばし、**ほかの人があなたに帯をして、望まないところに連れて行きます。**」

※これはペテロが晩年に殉教することを物語っています。

19 イエスは、ペテロがどのような死に方で神の栄光を現すかを示すために、こう言われたのである。こう話してから、ペテロに言われた。「**わたしに従いなさい。**」

●イエシュアの「わたしに従いなさい」(Fellow me=レーフ・アハライ：'רַחֵם אִתִּי)とは、「わたしの後を歩みなさい」です。私たちの歩みが「死と復活を通ったイエシュアの芳しい香りを放つ歩み」でなければなりません。実に重い一言です。初代教会では最初の殉教者ステパノがその模範となりました。彼が聖霊に満たされていたからです(6:4,6,8,55)。しかし忘れてはならないのは、このような彼を育てたのは、エックレーシアの霊の交わりにあったのです。それはイエシュアが命じた「新しい戒め」の内実である「互いに足を洗い合うこと」が儀式ではなく、信仰によって実体化されていたからです。聖書はそれをこう記しています。

【新改訳2017】使徒の働き2章42～47節

42 **彼らはずっと、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた。**

43 すべての人に恐れが生じ、使徒たちによって多くの不思議とするしが行われていた。

44 信者となった人々はみな一つになって、一切の物を共有し、

45 財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配していた。

46 そして、**毎日心一つにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、**

47 **神を賛美し、民全体から好意を持たれていた。**主は毎日、救われる人々を加えて一つにしてくださいました。

●彼らはイエシュアの「新しい戒め」を霊によって実体化していたのです。そのような中から、ステパノのような人が形造られたのです。中でも最も大切なのは「**パン裂き**」です。これは今日の聖餐式のような儀式的なものではなく、霊を活用してともにイエシュア・メシアのことばを「食べ飲みする」ことです。しかも「毎日」です。彼らはみことばに隠された奥義に日々を触れて歩んでいたのです。この歩みを回復することが今日の「王なる祭司」である私たちに求められているのではないのでしょうか。

三一の神の霊が、私たちの霊とともにおられます。

2025.1.19